

会費振込先 みずほ銀行川崎支店東北大学ワンダ-フォーゲルOB会 普通口座(370-1881604)

ホームページ <http://go.to/tuwv>

メールアドレスをお持ちの方は利根川さんに連絡して下さい：GWT00287@biglobe.ne.jp

チョモランマBC

3期(昭和39年卒)後藤 龍男

10月に3期の松木、佐藤、後藤、4期の及川、5期の藤田の5人でチョモランマBCまで行ってきました。昨秋にネパール側のカラパタールでエベレストを見たので、今年は反対側のチベット側から見てみようというのが旅の最大の目的でした。もう一つの動機は昔読んで憧れた河口慧海の「チベット旅行記」にあります。あれに書かれたチベットの風物や風景をこの目で見ようと言うわけです。ワングルの諸氏なら大方読まれたことがあるでしょう。

カラパタールまでは往復2週間歩かなければなりません、チョモランマBCは一步も歩かずにラサから車で行けます。その代わりおんぼろランクルで往復2000キロ、ひどい悪路を耐えねばなりません。ラサから先は4000～5000mの高地ですから、空気も薄く決して快適な旅ではありません。悪路を車で10日間揺すぶられたら持病の腎臓結石が一度に剥がれ落ち、シガールのホテルで血尿が出始め、帰国後激痛とともに大きな石が三つも出ました。腎臓結石をお持ちの方にお奨めのコースです。

チョモランマBCはチョモランマ直下の標高5200mの位置にあります。その少し手前に有名なチベット仏教のロンブク僧院と粗末なロッジが建っています。他に宿泊施設はありませんので、我々を含め外国人旅行者はすべてこのロッジに泊まりました。チベットは外国人旅行者が少なくありませんが、ラサより奥地はヒマラヤと同じく西洋人ばかりで日本人はあまり見かけませんでした。ロッジには若いご婦人も何人か泊まっていた。

ロッジから車で20分ばかり登るとチョモランマBCです。眼前に世界最高峰のチョモランマ北壁と流れ下る氷河下部が迫り、素晴らしい光景です。ネパール側のエベレストは手前のヌプツェやローツェが邪魔をして頂上部分しか見えませんが、チョモランマは上から下まですべて見る事が出来ます。欠点はチョモランマしか見えないことです。ネパール側は次から次へとヒマラヤの高峰が現れ見飽きませんが、チョモランマBCはチョモランマしか見えません。幾ら素晴らしい光景でも2時間も見ていたら飽きてきました。

ロッジのトイレの汚さには閉口しました。ドアもない開けっぴろげの床に落とし穴が並んでいるいわゆる“ニイハオトイレ”ですが、床一面に糞尿がぬたくり付けてあって足の踏み場もありません。悪臭もひどく、全員一晩トイレを我慢しました。外でのキジ撃ちには慣れています、このあたりは野犬が多く、群れをなして徘徊しているので、夜分外に出て用を足す勇氣は起きませんでした。これほどではないにしてもチベットを含め一般に中国のトイレ事情は世界最悪です。隣り合っ



写真を2枚お目に掛けます。1枚目はチョモランマBCからのチョモランマ、2枚目は標高5000mのパン・ラ峠からのチョモランマとヒマラヤ山脈です。(詳細は <http://www.5f.biglobe.ne.jp/~denzasou/index.html> に)

作並温泉での同窓会

6期(昭和42年卒) 渡辺 文隆

昭和62年以来18年ぶりの同期全体OB会ということで、懐かしさがつのったか、はたまたみんなが暇になったのか、卒業メンバー26名中18名が参加。うち8名は、ご夫婦での参加ということで 総勢26名の大部隊。秋田から、岡山から、大阪から 東京から 三々五々 作並温泉・ホテル一の坊へ集合したのが、10月29日(土)。ホテルフロント脇の 受付には、皆さんが戸惑わないように、学生時代と一番風貌が変わっていないという評判の、西君がご夫婦で座り、到着のチェック、会費の徴収、その後の諸会計を一手に引き受けてくれた。

午後6時、最後の駒村、田中両君が到着して全員勢ぞろい。6時半宴会へと…。宴会ではそれぞれの近況報告がなされたが、まだ半分近くが現役生活ということで、我々引退組はあきれやうなだれるやら…。近況報告中では、江原武君(大阪)がこの夏で「日本百名山」を完登したとか、斉藤進君がつい先日の岡山国体 山岳競技の地元ボランティアとして働いたとか、宗村文司君が5年前駐在先のバンコックで、かなりひどい自動車事故にあったりした話など、ここ20年(40年?)の皆様の変わりよう、変わらなさをネタにしばし話題に花が咲いた。

9時宴会お開き、そのまま全員が2次会会場へ移動。ホテル提供の水と氷。持込、差し入れの酒とつまみで懇談。この頃からやっと全員が相手を認識出来てきたようで、昔の関係に戻り、やたら場が盛り上がっていた。(ように思えた…)

11時、2次会お開き、名残は尽きず、残った酒とつまみを回収し、男子部員(?)だけで幹事部屋で3次会。(実はこの頃から筆者の記憶が定かでない…zzz…)

翌日は、用事で(ゴルフ?)東京へ帰る堤正尚君を除いた全員が山寺散策。さすが昔のワングル部員、一人の落伍者もなく二時間かけて山寺、立石寺を参拝。12時過、再度作並駅へ戻り、ニッカウキスキー蒸留所内レストランで昼食後、14時半、作並駅で再会を約し、全員満足そうな笑顔で散会。まずは成功裡のうちに終わった、TUWV第六期OB会 ではありません。

話題提供ということで、新井君が作ってくれた全員の記念写真ファイルを添付します。赤いチャンコが似合っている、変わり果てた皆様の映像をお楽しみください。

(写真右下から順に)新井武・鈴子、江原武、恩田達也・朱美、加藤邦明・頼子、駒村光彌、田中実、斉藤進・照子、堤正尚、西健・雪子、野村彰夫・霄子、原田健、増淵正昭・伯美、宗村文司、山田信行、和田勝寿、渡部惇、渡辺文隆・京子、青木祐二



7期の還暦同期会

7期(昭和43年卒) 真尾 征雄

43年卒業した7期生も、大多数が還暦を迎えた。そこで還暦記念の同期会を10月1日におこなった。場所は天元台の秘湯新高湯温泉で、翌日リフトを乗り継いで吾妻連峰をトレッキングしようと計画した。参加者は在籍23名中18名と多く、卒業以来始めて顔を合わせる人もいる。

前日仙台に入り、国岡の段取でゴルフをしてから現地入りした者が8名。ちなみに優勝は原だった。手戸の先導で福島から紅葉の磐梯吾妻をドライブして現地入りしたものが6名。米沢経由で直接入ったものが4名である。会食前にゆっくりと名物の露天風呂でくつろぐ。岩風呂や丸太をくりぬいた湯船に浸かり、手術の跡を見せ合ったり、孫の話をしたりする。残念ながら天気が悪い上、紅葉には少し早い。

俊朗の乾杯の音頭で宴会はにぎやかに始まった。近況報告を全員が行ったが、学生時代そのままに金子が茶々を入れるのでその度に脱線し、元に戻すのが大変であった。卒業以来初めて会う勝也や原も、37年

ぶりなのについ3年程前に別れたばかりのようで、違和感が無い。宴会後も車座になったの茶碗酒。第二の職場で働いている人、後継者が育つまで会社を背負っていかねばならない人、悠悠自適に過ごしている人と、還暦にもなるとまさに「人生いろいろ」である。同期の仲間から物故者が一人も出ていないのが何よりうれしいことである。

翌朝は、風と雨の音で目がさめた。風雨が強く、リフトは停まっているとのこと。残念ながら吾妻トレッキングは中止とする。朝湯に入り、ゆっくり朝飯を食べ、中には朝酒を楽しんでいる人もいる。

車に分乗して米沢市へ。地酒の酒蔵や上杉神社を見学し、昼食は山形名物の蕎麦を食べる。新蕎麦の打ちたてで美味この上なし。次回の同期会は、宇都宮の餃子を食べに行こうということとなり、幹事は栃木と群馬在住の勝也・五十嵐・山岸の3名にお願いすることにして同期会はお開きとなった。



8期9期 卒業30周年OB山行 第7弾 小雨に煙る尾瀬ヶ原で

8期(昭和44年卒) 相原 敬

【参加者】健一、千代子、桃谷、片野、片野奥、片野お嬢、原田、原田奥、高瀬、ムツ子(9期10人) 前田、教子、濱、美恵子、ちさと、拓哉、おぎゃ、小笠原、水上、三原、相原、敬子(8期12人)

上田代湿原の池塘にはヒツジグサの可愛い葉っぱが密集して、可憐な花を咲かせている。オゼコウホネの丸くて黄色い花も一輪だけ池塘の中央に咲いていた。それを眺める顔顔顔。みんなで尾瀬に来たのは、現役4年の夏合宿以来である。

OB山行も7回目ともなると、みな要領を心得ていて、細かな案内なしでも戸惑いはない。今までのOB山行は東北線がらみだったが、山域に行き詰まったのか、今回初めて上越沿線に踏み出した。

9月11日、片品村に全員揃ったのは正午近くになっていた。乗合タクシーに分乗して、鳩待峠までワイワイがやがや、あっという間に到着する。ニッコウキスゲと草紅葉シーズンの狭間の時期なので、峠の広場も閑散としていた。至仏登山口で思い思いの腹ごしらえをし、濱を乗せた汽車ポッポ隊は山ノ鼻を目指す。今日は尾瀬小屋まで登りなしの楽勝コースだ。川上川に沿ってブナの原生林を下り、橋を渡れば山ノ鼻の一角に到着する。

今回の初参加は、栃木県から三原君。家族連れが多くて勝手が違ったかもしれない。いよいよ尾瀬ヶ原の核心部に足を踏み入れる。ガスがかかったり切れたりする中で、疎らな拋水林の彼方に尾瀬ヶ原を見守る至仏山と燧ヶ岳が見えるのは嬉しい。草紅葉が始まりかけており、湿原は今つかの間の休息をとっているかのようだった。広い湿原を、賑やかな集団が長くなったり短くなったりしながら進んでいった。そうこうしている内に雷様が至仏からゴロゴロとやってきて、ポツポツと来たかと思ったら本降り。いきなりの雨に傘を広げて竜宮小屋に逃げ込んだ。びしょ濡れになってから雨具を付けるが、皮肉なことに小屋から出ると雷雨も通り過ぎて小降りにになった。



燧ヶ岳を包んだ雲に、うっすらと虹が架かり、みんなで嬉しがることしきりだった。霧雨の中で真っ赤に燃えて光っているナナカマドやウルシの紅葉、そして湿原を這う霧が、ゆるゆる歩くOB隊を包む。燧ヶ岳の裾野に張り付く下田代十字路の尾瀬小屋に入る。風呂上りに、立寄り者用の休憩所でビールパーティー、そして夕食後は談話室に集まって、飲みなおす。とにかく集まれば酒とおしゃべり、昔のままだった。

翌日は、尾瀬小屋の楽しい思い出をザックに詰めて、小屋前で記念撮影して7時に出発する。今日はヨッピー橋経由で山ノ鼻へ。湿原の至るところに朝霧がたちこめ、尾瀬独特の雰囲気醸し出している。絶妙なガスの流れ、小雨に煙る周辺の山が幻想的であればあるほど22名の集団が際立ってゆく。やはり尾瀬にはのんびり歩きが似合う。夏の残花を楽しみながら到着したヨッピー橋のたもとで、スイカとコーヒータ임。拓哉が一日中担いでいただけあって最高の味だった。

再び尾瀬ヶ原のど真ん中に着く頃には、池塘に広がる雨滴の輪が目立ち始め、山ノ鼻では雨が本気になってしまった。少々のビールとミニラーメンで尾瀬ヶ原のフィナーレとする。鳩待峠まで今回唯一の登りも意外に順調だった。呼び寄せたタクシーにあわたくしき乗込んで鳩待を後にした。幡谷温泉の温い露天風呂で鳥肌を立てながら長湯をしたのち、下山祝いに臨む。年に一度のOB山行だが、今後はメンバーの拡大や実施時期、山域、形態などOB山行の目的をも含めて調整しよう、等と真面目に話し合ったりしながら、再会を約束して温泉で解散となった。【記】あた

岩手山系葛根田川北の又沢遡行(20、21、22期)

21期(昭和57年卒) 富士原 康浩

2004年夏の黒部源流山行は、中年にあるまじき過激山行となったため、2005年の夏は“快適で楽ちんな”葛根田川北の又沢と相成った。メンバーは、20期の岩屋、21期の千田、富士原、22期の石川、手塚の5名。本山行に先立ち、本番より厳しいプレを3回行った。

5月28日 : 丹沢山系勘七ノ沢

6月18～19日: 丹沢縦走(黍殻山～蛭ヶ岳～丹沢山～塔ノ岳)

7月15～17日: 南アルプス(広河原～北岳～間ノ岳～広河原)

出発は8月5日、東北地方の梅雨が明けたばかりで幸運にも晴天猛暑。途中、仙台駅で土屋親子の見送りを受ける。雫石駅で予約していたタクシーに乗り込み、いよいよ葛根田川へ。膝下程度の渡渉をしながら進むうち“お函”と呼ばれる美しいゴルジュをなんなく通過し、入溪から約3時間で予定テンバの大石沢合に出る。さっそく釣り糸を垂れる。釣果は岩魚5匹。焚き火を囲み、塩焼きと骨酒を楽しむ。

2日目は、いよいよ核心部。テンバから1時間ほど進むと“葛根田の大滝”に遭遇。左岸を高巻き、落ち口でザイルを使う。滝ノ又沢を過ぎると小滝やナメ床が連続し、源頭の様相を呈してくる。水線を忠実にたどり、若干の藪漕ぎを強いられるが、予定通り八瀬森山頂直下の登山道に出る。10分ほど下ると八瀬森山荘に到着し、快適な小屋泊まりを楽しむ。

3日目は、湿原に咲く高山植物を愛でながら滝の上温泉に下る。人にほとんど会わず、静かな東北の山を楽しむ。途中立ち寄った三ツ石湿原は、なかなかの別天地。湿原脇の三ツ石山荘は1年前に新築されており、いかにも快適そう。行きに宿泊予約していた宿に着くなりビールを飲みまくる。そうこうしているうちに雨が降り出す。貸切状態に近いこの温泉旅館で盛大な反省会をし、「来年も沢遡行をやろう」と誓いあう。

(その後、21期の大江が経営している横浜市関内の焼肉屋“燦星庵”において企画検討会が行われ、2006年の夏合宿は、“知床半島のサンルイ川”を目指すこととなった。)



三石山頂にて 前列左から岩屋、千田
後列左から石川、富士原、手塚

チベット紀行

5期(昭和41年卒) 櫻 洋一郎

8月上旬から中学時代の同級生2人とチベット西部を旅行し、カイラス山・トレッキングをしてきた。3人は夫々この山に永年の想いを温め続けていた。学生時代に読んだスウェン・ヘディンや河口慧海のチベット探検記にその山容を思い浮かべ、なんとか我が足で歩いてみたいものと……。

ネパールの首都カトマンズから陸路、中・尼国境を越え、ランドクルーザーで標高4000m～5000mの高地1,000 kmを6日間かけて西走。仏教徒、ヒンズー教徒の聖地マナソワール湖、カイラス山をトレッキング。復路、チョモランマ(エベレスト山)を中国側ベースキャンプから俯瞰しようという、21日間の旅。実はヒンズー教徒(インド人)巡礼団14人のツアーに我々がジョインしての旅であり、貴重な経験をしたがその話は又の機会にする。

高度順応：最初の宿泊地ニヤラムは3750m(富士山の頂上)。高山病でフラフラ。ここに一日停滞、4,000mまでのハイキングなどで高度順応を計る。ダイアモックス(血管を広げ、血行をよくする薬、頻尿に悩まされる)の三日間服用で高度にすっかり慣れたが、流石に酒を飲む気にはなれなかった。

ランクルの旅、行きはよいよい、帰りは怖い：乗用車は全て4輪駆動車、トヨタのランドクルーザーのみ。往路は拍子抜けするぐらいに順調に走破。事前の情報では河川の氾濫で渡河不能、目的地に到達出来ないこともあり得る、といった悲観的な情報も交錯し、我々も覚悟を決めていたが……。ドライバーの話によれば、近年、主要河川には橋梁を架設、勿論砂利道ではあるが2車線道路が完成とのこと。ところが、問題は帰路。数日前の降雨で川は氾濫、道は方々でズタズタ、道路上でランクルはスタック。その度に同行のトラックに牽引を頼む羽目に……。

おまけに頼りの車両軍団はパンク、スプリングの破損…と日に日に劣化。極めつけは連続2日間、夜半24時過ぎ目的地到着といったタイトな日程。暗黒の中、道幅すら定かでない道を探し、崖のような急坂を上り、17,8時間の連続走行に皆声なし。お陰で、チョモランマB・Cトレッキングはすぐ近くまで到達していたにもかかわらず、日程の関係で諦めざるを得なかった。帰りは悪路の旅を満喫。

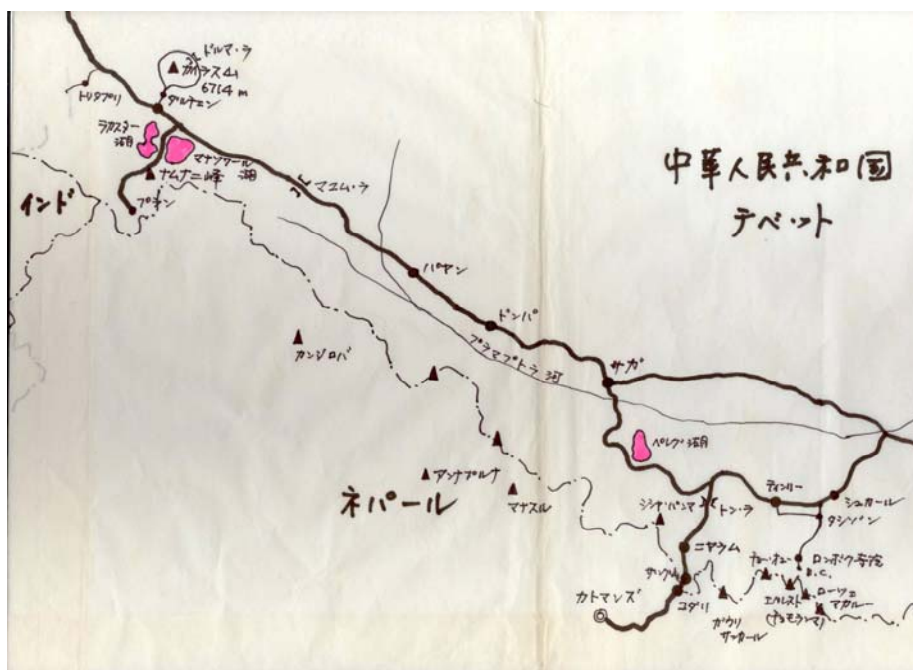
カイラス・トレッキング：カイラス山は6,714m。聖山が故に未踏峰。独特の形をした独立峰。トレッキングはその周囲52kmを二泊三日で歩く。チベット人たちはコルラ(巡礼)、たった一日で駆け抜ける。一日目、落差数百mに及ぶ、いく筋もの滝が両側から落下する明るい谷“黄金溪”インダス河の源流を辿る。いた、いた、五体投地札の巡礼者が。我々が飛び石の上を渡った沢も平地と同じように水の中に倒れ伏し、ずぶ濡れで起き上がり、何事もなかったように進んでいく。尺取虫の如き歩みだが、その迫力には息の止まる思い。カイラス山は行く先々でその山容を変え、その日のキャンプサイト、ディラプール・ゴンパ(寺院)で極めつけの北壁を見せる。あいにくモンスーンの時期、とうとう頂上は見せてくれず。夜の気温は0℃近くまで下がり、羽毛服が役立つ。二日目は最難関、標高5,700mのドルマ。ラ(峠)までの標高差800m近い登り。4,900m(酸素量が平地の半分)からの登りだけに容易ではない。一足歩いてはゼイゼイと息をつなぎ、二足歩いては天を仰ぎ、“懺悔坂”、慧海言うところの、“三途の逃れ坂”を登る。峠はタルチョ(経文を印刷した五色の旗)が翻り、脱ぎ捨てられた衣服が足の踏み場もないぐらいに散乱。ここからは急な下り坂の連続。そして再び溪谷沿いの道となって本日のキャンプサイトへ。三日目はズルフク・ゴンパを越え、ダルチェンに戻って一周を終える。三日間を歩き切った充実感と、高山病にならなかった安堵感で至福のひとつき。



中国によるチベット併合、ダライ・ラマ14世の亡命、文化大革命時の仏教施設の徹底的な破壊でチベット文化は壊滅的に被害を受けた。ゴンパ(寺院)などは復旧されつつあるがチベット人の心までは癒される筈もなく、怨嗟の声ばかり。中国政府としても本来は見せたくない場所なのだろうが外貨獲得の貴重な遺産だけに痛し痒し、といったところだろう。

チベット高原は夏の盛りとはいえ乾ききった荒地の中に緑はほんの僅か。勿論、立木は皆無。国境を越えたネパール側は緑滴る亜熱帯、しっとりとした空気と緑の有難さを実感した旅だった。

(詳細は <http://www5f.biglobe.ne.jp/~denzasou/index.html> に)



不老山登山と中川温泉

第6期(昭和42年卒) 加藤 邦明

同期会で作並温泉に集合してから2週間が経った。“そろそろ気分転換の虫が”と言う事で、近場で久々の丹沢に紅葉を求めてみることにした。丹沢ならおかあさんもお好みの中川温泉で締めくくれるので、小規模登山の不老山で良いかな、のコース設定にした。

11月11日に犬の散歩、人間の朝食後、7時55分に鎌倉市長谷の自宅を出発した。10時25分に世附浅瀬へ到着した。森林管理署のゲートが開いていないので、手前の駐車スペースに停めて、登山の準備完了。



浅瀬(10時35分:手洗いあり。)ー大又沢出合(10時50分)ー世附川に架かる吊橋(10時55分)ー沢横断(11時25分:汗かき。)ー世附峠(11時55分ー12時08分:寒い。曇り。昼食。)ー不老山南峰(12時40分:富士山が良く見える。自衛隊の高射砲の音と、富士スピードウェイの騒音が結構賑やか。)ー不老山(12時47分ー12時57分:トリカブトの写真撮影。)ー世附峠(13時23分ー13時28分:曇り。愛鷹山がくっきり。)ー吊橋(14時13分:親切な外国の方に夫婦の写真を撮ってもらった。)ー林道を上流へー名瀑夕滝(14時23分ー14時25分)ー浅瀬(14時40分:曇り)。

浅瀬(14時55分:山男・山女から観光地へ行くので靴を履き替えて出発)ー中川温泉山北町営「ぶなの湯」(15時07分)。2時間コースのお湯に浸かって、100円の足マッサージ機で満足して、試食した柿をお土産に買って、16時12分お帰りとし、19時35分に帰宅した。



「蓼科山頂ヒュッテ」小屋番雜記2005

8期(昭和44年卒) 三日月 道夫



4月 小屋明け準備で山入り、前日の雨で緩んでいる雪を半年ぶりの小屋へ。ソーラパネルが1枚飛ばされていた以外被害なし。GWの客の受入れ準備をしてヘリ待ちするが、なかなか飛んでこず。いったん下山し、数日後ヘリに乗って3分で雪の上に着地で小屋入り、荷揚げがそろい準備完了。



5月 GWは比較的天候に恵まれ、多くの登山客がきているが、頂上直下の急な箇所に補助ロープがあるものの、てこずっているグループも多く見られた。その後寒い日が続いて例年より雪解けが遅く、5月末まで残り、一番先に咲く花ミネズオウもやや遅く咲き出した。槍ヶ岳に突き刺さって落ちる夕日や、彩雲(逆さにじ)を初めて見て感激。

6月 ようやく花のシーズンになり次々と花が咲き出す時期で、どこで一番先に見られるか探し写真を撮るのが楽しみである。ここまで雨が少なくタンクの水が心細い時期であったので、屋根の水をすべて貯めるべく改良工事をしたが、一雨降れば安心程度に戻る。



7月 梅雨のシーズンではあるが、今年は花が多い年で、昨年見られない場所にもたくさん見られ、また今年初めて気がつく花も多々あり。この時期が一番のお勧め時期なのにお客さんは少なく残念。年1回のイベントである音楽祭(毎年7月の最終金曜日)への参加が増え、約80人のお客さんの対応準備でおおわらわ。当日は天気もまずまずで皆さんに楽しんで

いただき一安心。

8月 このシーズンになると、客層が変わり、観光地気分の軽装の人、子供ずれ家族が多くなる。3歳で歩いて登ってきた子供さんが最年少記録(ちなみに最高齢は79歳)。また天気にかかわりなく、時間も気にしないで遅く来る人もいたので心配ごとが多い。この時期の天候はいまいちの日が多く、すっきりした展望がない日が続く。



9月 コケモモなどの実がなり、日が短くなるにつれ寒さを感じてくる。頂上付近ではなかなか綺麗な紅葉にはならず。天気を見計らって小屋閉めの準備で屋根ペンキ、防腐塗装などを行う時期でもある。

10月 下に見える高原のカラマツ林が黄色に輝く。例年より寒さが来るのが遅いが初雪がくると、景色も一気に冬模様になり、小屋閉めをして半年の小屋が終わり下山。

その他はBLOG<http://blog.so-net.ne.jp/tateshinayama/>

小屋のHP <http://www.tateshinayama.com/> を参照ください。

*個人のHPもよろしければ見てください。 <http://mmikazuk.at.infoseek.co.jp/index.html> です。

黒部の巨人・丸山東壁 左岩稜を登る

8期(昭和44年卒) 佐藤拓哉(タック&オギヤー)

壁をどこまで登っても内臓助谷の流れの音が響いてくる。夏の暑い日差しの中、去年から目標にしていた黒部の巨人・丸山東壁に取り付いている。眼下には内臓助谷が広がっており、素晴らしい高度感である。

8月28日6時30分、前日確認しておいた取付きから登り始める。岩登りのイメージとはほど遠い枯葉の堆積した急斜面の登りから始まる。尾根筋に沿ってさらに藪漕ぎが続けるとようやく岩が出てくるが、ボルト

やハーケンが見当たらない。とにかく灌木や木を頼りに登れそうなところを登るが、なかなか先が読めない。

3ピッチ目の途中からようやくすっきりとした岩になり、カンテに沿ってボルトが連打されている。とりあえずルートが間違っていなかったことがはっきりし、ほっとする。アブミを使ってボルトラダーを登り、カンテの途中にあるビレイ点でピッチを切る。

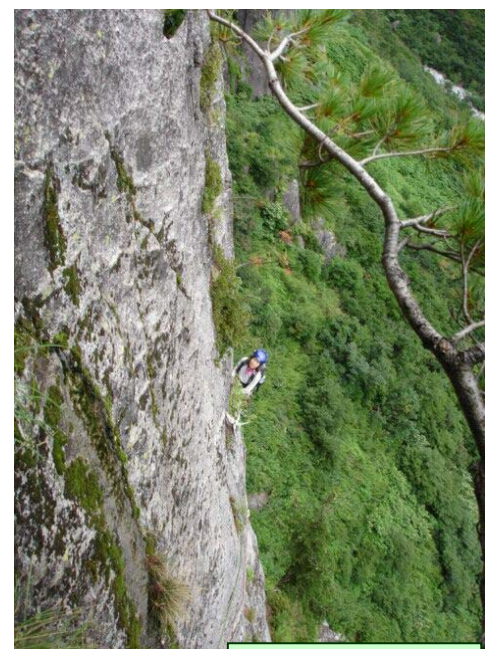
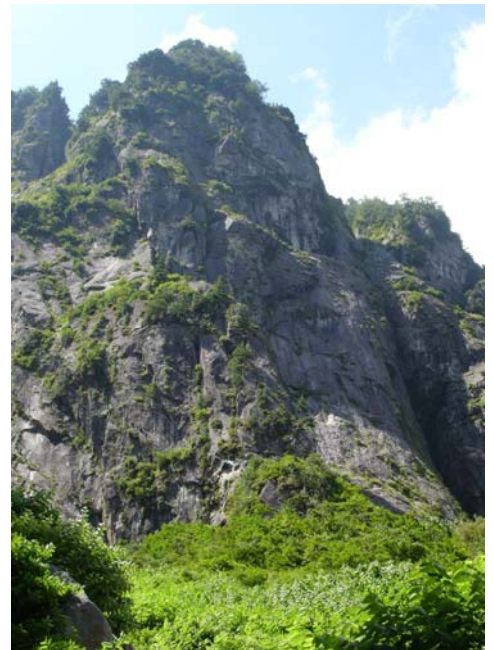
4ピッチ目の出だしは10mほどのいやなトラバースである。中ほどでスタンスの使い方がぎこちなくなり、落ちるかと思った。フェースの左側に来てみると、カンテのすぐ右側にボルトラダーがあるが、数m木登りしないと届かない。木の枝に3ヶ所ほどランナーをとりながら登り、ボルトにアブミをかける。この岩に移るところが怖いという話であったが、実際やってみるとどうということもない。

5ピッチ目も悩ましいピッチである。ごつごつした凹角を登ると、大きな岩に行く手を阻まれるようになる。いったいどこを登れと言うのだろう。大岩の左を覗いてみると、ジメジメした急斜面に木があるので、奥の木を頼りジェードルを登る。この上のバンドを右にトラバースし、フェース右端のカンテを人工で登ると安定したテラスに出る。はるか下を内蔵助平谷が流れている。急いで帰るわけではないのでのんびりランチタイムとする。いい天気になり、太陽が暑い。

6ピッチ目からリードをオギヤーに代わる。7ピッチ目からはフェースの登りであるが、ボルトラダーがなく、左上気味のクラック沿いにほとんどフリーで登る。ハーケンが少なく、頼りないブッシュでランナーを取る。技術的にはそれほど難しくはないが、クラックには泥が詰まっており、疎らな草付きとなっているので、滑らないよう神経を使う。リードのオギヤーは、ゆっくりであるが着実に登っていく。下からは見えないが、フェースの途中にビレイ点があり、そこでピッチを切る。

8ピッチ目はまっすぐ上に伸びているボルトラダーの単純な人工登攀である。リーチのないオギヤーにとってはボルトが遠いのか、たまにチョンボ棒を使って登る。最後は凹角部を右上し、終了点となる。この先もルートは続くが、登攀としては面白くないということなので、これで完登したことにする。

常に見える隣の緑ルートの大ハングは登攀意欲を誘う。来年の夏はぜひこの大ハングを突破したい。



4 P 目のトラバース

山を走る ～山岳耐久レース「長谷川恒男カップ」～

22期(昭和58年) 西川 雅明

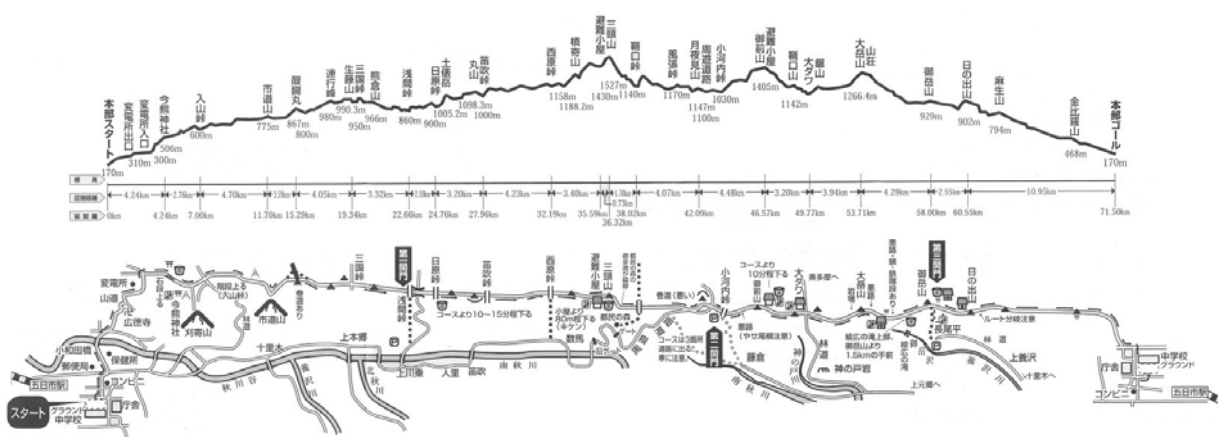
夜の山道、金比羅尾根の出口。もう前後に他の選手はいない。車道に出たら、あとは無理をしてでも走れ。体は泥だらけ。足は重たいが、もうゴールは見えている——10月10日、午前0時23分、僕の耐久レースは終わった。五日市から三頭山を周回する71.5km。11時間23分23秒。2018人の出走者中57位。50位以内を目指していたが、もうどうでもよくなっていた。走ることが僕の愉しみだ。

何も運動しなかった30代。山岳会に入り月2回ペースで近郊の山に通った40代。まともなトレーニングを開始したのは、ほんの1年半前のことで、僕はこれまで決してまじめなランナーではなかった。もちろんマラソ

ン経験はあったけれど、それは20代後半の一時期のこと。ワングルを卒業してから二十余年の大半は、日常の多忙に打ちのめされていた。それに1年半前に走り始めたのも腰痛のリハビリが目的。きわめて不健康なランナーだった。

「何故走るのか」と聞かれる。走ることに理由はない。ただ走っている状態が好きだ。あらゆるこだわりが取
るに足りないことに思える瞬間がくるからだ。「この多忙の中で走ってよく疲れないね」と不思議そうに聞かれ
ることがある。そうではない。多忙だから走ることで精神の均衡が保たれるのだ。そんな気がする。そんな気が
するから走り続けている。

＊ 第13回 日本山岳耐久レース「長谷川恒男カップ」



33期(平成6年卒) 星 征雅

9月18日(日)、4時起床。二日酔いか高度のせいか、頭が痛む。裾野に陽が昇る。今日もまた素晴らしい日和になりそうだ。整地された砂礫に、竹馬が心地よく食い込む。土よりも歩き易い。頂上まで行けるぞと言う確信が生れる。山中湖、河口湖を見下ろし、青々とした高度感に高揚を覚えつつ、地道に一步一步刻んでいった。竹馬には自転車用のトゥークリップを装着している。つま先で持ち上げて登るのが、山スキーに似ているかもしれない。シーズン終わりだが登山客が多く、かなり目立っていた。声をかけられ、写真を撮られたのが、100回以上あったと思う。

7合目入口の花小屋から振り返ると、来た道が一望できた。よくも登ってきたものだ。花小屋から日の出館へは岩場を避けキャタピラ道を進んだが、一步ごとに崩れる悪路に泣かされた。進んだ足が沈みきる前に反対の足に体重を移さなくてはならない。新雪をラッセルしているような重労働で、体力が急速に消耗していった。さて、7合目出口の東洋館(c2900)上は、鎖場だ。人々の好奇の目の中、果敢に岩場に立ち向かったが、冷や汗の連続で、20mほど登った所で断念した。中断した区間は、標高差にして110mほどである。その先は、岩場を避けて須走の下山路への道を登った。既に昼近い。頂上までの標高は残り700m。冷静に判断すると、無理である。気力でペースアップできる道ではない。下山の事を考え、竹馬登山は、14時を制限時間とした。時間切れまで、全力を尽くすのみである。

13時50分、須走口との分岐に出た。砂礫は一層荒く、傾斜はますますきつく、体力はますます少なく、どうにも登れなくなってきた。すぐ上に本八合目の富士屋ホテルと江戸屋が見えた。少し上に頂上も見えた。14:00、標高3340mで企画終了とした。不思議と口惜しさは無かった。燃え尽きていた。もう半日あれば間違いなく登れたと思うが、今回はこの限界を謙虚に受け止めることとした。



せめて頂上は踏もうと、先行したメンバーを追いかけて、空身で竹馬だけ持って頂上を目指した。空気の薄い果てなき砂礫の坂道を、背丈より高い竹馬を担いで登る姿は、罪人が十字架を担いで行く姿を連想させた。9合目の鳥居でメンバーが待っていた。15:30だ。頂上は間近だったが、合流して下山道へトラバースした。

下りはひたすら長かった。下山用の体力まで使い切ったのは、15年前の二次新以来である。日が没し、中秋の名月に白く浮かび上がる石畳を、竹馬を担いであえぎつつ、歩き続けた。

登山中、「何のため？」という質問を受けた。「遊びです」と答えた。「トレーニング？」との質問もあった。確かに鍛錬である。尤も、筋力ではなく気力を試されたのだが。「竹馬の方がラクですか？」という無邪気な質問もあった。残念ながら竹馬に実用性は無い。竹馬が実用的に活躍できる場があれば、新たなチャレンジに取り組みたいと考えている。

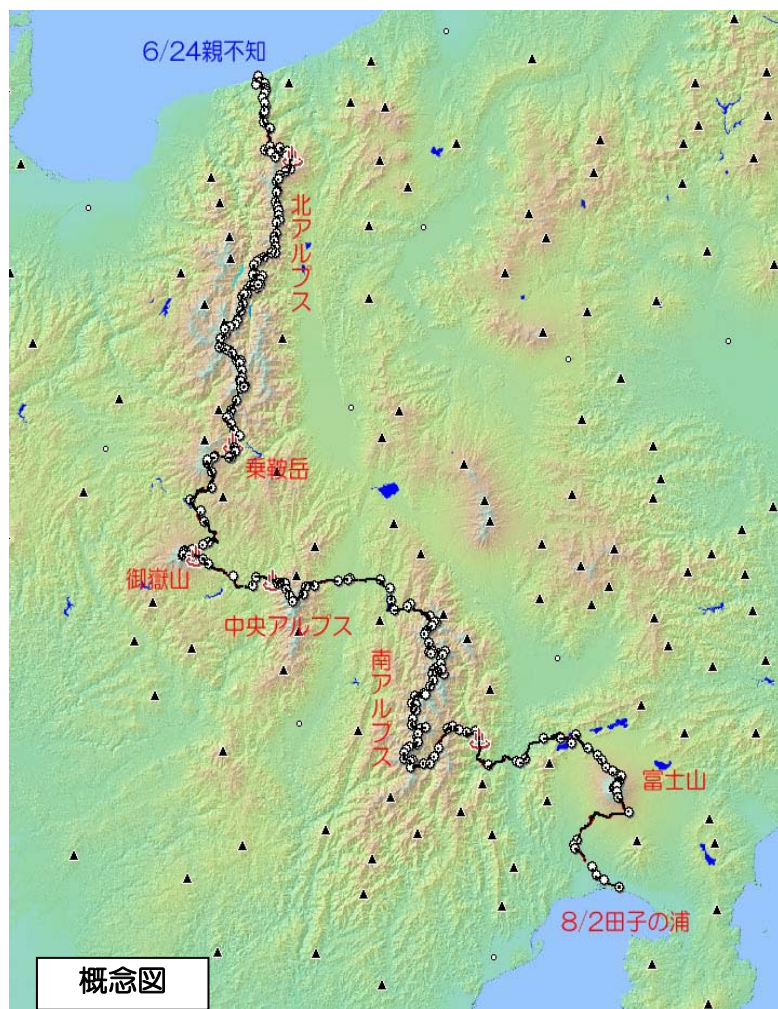


日本列島横断 (2002.6.24~8.2)

36期(平成9年卒) 大森 秀一

後先考えずに会社を辞め、好きなカメラを担いで親不知に向かったのは3年前の梅雨だった。今思えば、つまらぬ会社勤めからの逃避が半分、『自分は一体何がしたいのか?』自分探しの目的が半分であったろうか。アルプスの尾根伝いに、一人日本海から太平洋まで歩いてみれば、何か見つけられるような気がした。

果てしない縦走であるから、気力・体力はもちろん、計画段階では熟慮の上に行程を練らねばならなかった。ヤマケイ、岳人の記録は全くあてにせず、地図との格闘がふた月ほど続いた。特にエスケープルートは



行程表（39泊40日、全長580km）

2002年6月24日 7:24 日本海・親不知海岸発

日付	山域	到達地	天気
6月24日	北アルプス	白鳥小屋	曇時々雨
6月25日		梅海山荘	雨
6月26日		朝日小屋	雨のち曇
6月27日		朝日小屋	曇
6月28日		蓮華温泉	晴のち曇
6月29日		白馬山頂小屋	晴
6月30日		唐松山荘	晴のち曇
7月1日		五竜山荘	雨
7月2日		冷池山荘	雨
7月3日		針ノ木小屋	雨
7月4日	乗鞍岳	船窪小屋	晴
7月5日		烏帽子小屋	晴
7月6日	御嶽山	三俣山荘	曇時々晴
7月7日		槍岳山荘	雨のち暴風雨
7月8日	中央アルプス	北穂高小屋	曇
7月9日		上高地	曇
7月10日	南アルプス	鈴蘭小屋	雨
7月11日		肩之小屋	晴
7月12日	御嶽山	野麦集落	快晴
7月13日		開田高原	曇のち雨
7月14日	中アルプス	二ノ池小屋	曇のち雷雨
7月15日		木曾福島	雨
7月16日	南アルプス	木曾福島	雨のち晴
7月17日		木曾小屋	雨のち晴
7月18日	山ノ内	伊那市	晴
7月19日		橋本山荘	曇時々雨
7月20日	山ノ内	仙丈ヶ岳稜線	晴
7月21日		両俣小屋	晴
7月22日		農鳥小屋	晴
7月23日		塩見小屋	晴のち雷雨
7月24日		高山裏遊難小屋	晴
7月25日		赤石岳遊難小屋	雨のち晴
7月26日		聖平小屋	晴
7月27日		二軒小屋	晴
7月28日		大滝温泉	晴
7月29日		本栖湖畔	曇時々晴
7月30日	山ノ内	佐藤小屋	晴
7月31日		宝永山荘	晴
8月1日		富士宮市	晴
8月2日		田子の浦	曇りのち晴

2002年8月2日 10:11 太平洋・田子の浦着

大作となつてしまい、書き終えたときにはそれだけで満足してしまったのを覚えている。

1. 親不知～北アルプス前半(2002.6.24～7.3)

海拔0mの親不知海岸を意気揚々と出発。梅海新道をひたすら南下する。梅雨時である。連日雨に祟られ、寒さに震えた。自分以外の登山者は、初日を除いて誰もいない。熊には2度会う。朝日岳北面は雪渓がベッタリと張り付き、ルーファンに苦労した。予想外の残雪で、朝日岳から雪倉岳へは通行不能の事態に陥る。どうしても諦めきれず、蓮華温泉まで一度下山し、根性で白馬岳に登り返す。前半戦の難所・不帰ノ嶮を抜けたときはホッとした。以降、唐松～五竜～鹿島槍と風雨に晒されながらも快調に走破。相変わらず稜線には誰もいない。小屋は毎日貸切状態だ。冷池から針ノ木越えは、この旅最大の危機に見舞われた。稜線で雷に遭遇し、黒焦げ一歩手前の恐怖。針ノ木岳の下りでは、道が雪渓で消滅。急斜面を滑落しないように半ベソ状態で道なき道を下る。小屋が見えたときはとても人恋しかったものだ。この時期の北アは冬山アイゼン、ピッケルが必携であったことを何度も悔いた。

2. 北アルプス後半(2002.7.4～9)

船窪小屋では小屋の方々や他の登山者と一緒に酒を飲み、ずいぶん賑やかに囲炉裏を囲んだ。烏帽子岳ではコマクサが出迎えてくれ、雪渓の融水で頭を洗った爽快感が今も印象に残る。ここから北ア裏銀座の核心部である野口五郎、鷲羽岳を経て三俣山荘へ。ガランとした小屋の2階、コーヒーを飲みながら、夕日に染まる北鎌尾根を眺めた時の感動は一生忘れまい。翌日は風雨の中、三俣蓮華～双六～西鎌尾根と黙々と稜線を伝う。千丈沢乗越から槍ヶ岳までは暴風雨となり、這って進んだ。北穂の頂からは、大キレット越しに暮れる槍ヶ岳を眺め、ひとり物思いに耽る。北ア最後の日、奥穂、前穂と経由して岳沢を一気に下り、2週間ぶりに下界の人を発見。河童橋の袂に宿をとる。

3. 乗鞍岳～御嶽山～中央アルプス(2002.7.10～18)

台風の中、上高地から釜トンネルを抜け、白骨温泉を経て乗鞍岳を目指す。1週間、百数十キロにわたる地獄の道路歩きはここから始まった。乗鞍スカイラインでは、通行止めの道路を大手を振って歩く。その一方で、乗鞍山頂から野麦峠への道は半ばヤブに埋もれようとしていた。ここから御嶽への道路歩きも、雨中、足

の痛みに比例して惨めな気持ちになる。コンビニはおろか、自動販売機さえない。誤算だった。御嶽登山ではD、B、Lと温泉饅頭で通し、あまりのひもじさに泣けた。なぜか道にも迷い、さらに御嶽の頂で壊れた避難小屋と落雷の恐怖と戦う。頂上から木曽福島町に至る30kmの修験の道歩きにも雨の中閉口した。こうして御嶽の怖さと雄大さを肌で感じた。旧中山道の宿場町には、スーパー、レストラン、食堂、宿屋と一通りあり、3週間ぶりに文明の味と再会。風呂にもゆっくり浸かり、思わず頬が緩んだ。台風で1日停滞の後、中アへ向かう。登山道が崩壊していたため、遠回りルートを探り無事に木曽駒を越えた。翌日は『聖職の碑』でLをとり、西駒山荘から一気に下山。そば街道と呼ばれる道を伊那谷に向かって下りる。途中、谷を隔てて南アの山々が見えたときは感慨深かった。

4. 南アルプス(2002.7.19~28)

伊那から高遠を経て戸台へ向かう。車が猛スピードで通り過ぎてゆく脇をてくてく歩く。田舎のバス停で雨宿り。私の時間はゆっくり流れてゆく。戸台の橋本山荘のおばあちゃんは、今も元気であるだろうか。大変お世話になった。北沢峠へは登山道荒廃のため、南ア林道を忠実にトレース。賑わう峠を人通りも少なくなった頃に出発した。小屋は軒並み定員オーバーのため、この日は小仙丈ヶ岳手前のC2700付近でビバーク。やっと梅雨明け宣言が出たが、とても寒くて眠れず。翌日は仙丈ヶ岳を越えて野呂川越を両俣小屋へいったん下る。ここから北岳へ登り返し、以降、白根三山、塩見岳への静かな道をたどる。さらに南下し、三伏峠の花畑、小河内岳小屋からの富士山は見事だった。10年ぶりに荒川三山と再会し、俄雨降る中、赤石岳を一気に登る。頂上小屋で震えていると、夕方から雲が切れ、見事な山並みが足下に広がった。赤石岳からは百間洞を通って最南端の3000m峰・聖岳を目指す。南ア南部のバス便が途絶えた影響か、シーズン中というのに縦走する者は数人しかいない。深山の趣が抜群だった。聖岳から一気に下って榎島、二軒小屋と林道を北上。二軒小屋での一夜はこの旅で最も快適だった。南ア最終日は伝付峠を越えて甲州側へ下りた。梅雨の大雨で登山道が崩壊しており、こも苦労した。久しぶりにアスファルトの道を歩いて大滝温泉泊。



5. 富士山～田子の浦(2002.7.29~8.2)

大滝温泉から本栖湖への約40kmの道路歩きは、死ぬほど長かった。富士川の鉄橋で最低高度 海拔210mとなり、ここが事実上の富士山登山口となった。この後、脱水症状になりフラフラになって本栖湖へ。洪庵荘からは旧5000円札の富士山は見えぬ。翌日、精進口から青木ヶ原の樹海に道を採る。自殺防止呼びかけ箱を脇目にしばらく行くと、林道が交錯する中、またも道に迷う。道はあるのだが、磁石が利かず太陽も見えないので方向が分からない。このときばかりは焦った。青木ヶ原の恐ろしさを痛感。たまたま営林署の人と出会い、事無きを得た。その後、何もない旧登山道を五合目へ。都会並みの喧騒には目を疑った。翌日、日本海を出発して38日目にして富士山・剣ヶ峰に立つ。感慨無量。下山時、宝永山麓で熊とニアミスし、危うく食われそうになった。あとは夏空の下、ひたすら長い道路歩き。富士宮、富士市を抜けて8月2日午前10時過ぎ、太平洋に到着。(’05.12.9 記)

計画、記録詳細 : <http://www.interq.or.jp/tiger/oomori/index.htm>

女の子フリー2005 蔵王(刈田岳、熊野岳)

小川 かおり

■コース概要 清溪小屋上駐車スペース→刈田岳→刈田岳レストハウス→熊野岳→刈田岳レストハウス→

清溪小屋上駐車スペース→GOAL 清溪小屋(2日目は駐車スペースに戻るだけ)

■メンバー PL:阿部(3年)、SL/気象/会渉:長井(4年)、ESSEN:渋谷(2年)、装備:森田(2年)、
M:山下(OG2年)、大木(旧姓高橋 OG5年)、田中(旧姓徳島 OG5年)、小川(OG8年)

10月22日(土)午前4時、部室集合。女の子フリーとは思えない集合時間の早さ！久々の部室へ行ってみると、金曜晩から飲んで部室で一夜を過ごす現役男子が3名……。あー、ワングラーってこんなだよなあ、なんとなくほのぼの。そのうちわらわらと女の子登場。私は久々の参加のため、現役生は全員初対面。ちょっぴり緊張したが、往きの車内ですっかり打ち解けた(つもり)。

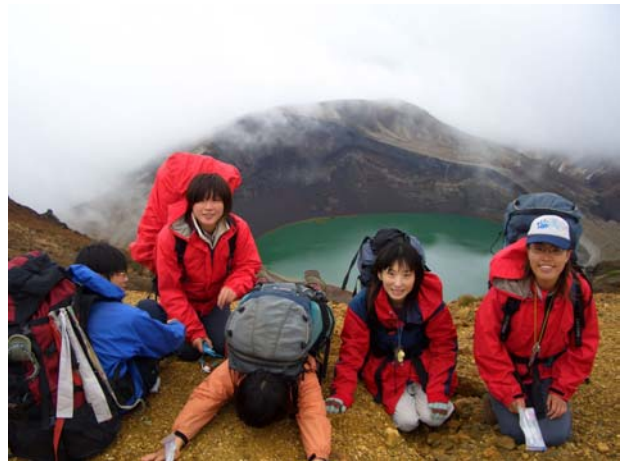
紅葉の美しい蔵王エコーラインを上っていくと、なんと途中でゲートが閉まってる！8時までゲートが開かないとのこと。もう通行制限をかけなければならない季節なのだ。はぁー、せっかく早く出発したのに……。しょうがないから車内で皆、寝る。ゲートが開くまで約1時間半程待たせようか、天気はどんどん悪くなり、雨が降り出した。雲行きもすこぶる悪い。こりゃ正規ルートはやめたほうがよさそうだね。

というわけで、本来の企画では1日目に屏風岳へ行くことになっていたが、予定を変更して熊野岳をピストンすることにした。START地点は、今夜泊まる清溪小屋の上部にある駐車スペース。女の子ならではの？のペチャクチャお喋り山行の始まりだ。とにかくしゃべるはしゃべる。あっという間に刈田岳に到着。ピークにある神社でおみくじを引いて大騒ぎ。トイレ休憩に寄ったレストハウスでは玉こんにやく食って大騒ぎ。悪天候にもかかわらず、元気でよろしい。元気に負けたのか、雨もどうにか止んだ。

休憩後、熊野岳(百名山)を目指す。天気が良ければ右側にお釜が見えるはずだが、どガスで何も見えない。蔵王にくるといつもこんな天気だよなあ。それにしても寒い、寒すぎる。走るようにして熊野岳登頂。寒すぎるので三角点を踏んで遊んだりすることもなく頂上にある非難小屋でL。数々の伝説を持つというスーパーエッセン長・渋谷が取り出したのは……。納豆！！Lで納豆？！1人1パックずつの納豆に、生トマトをスプーンでくりぬいたものをいい感じ？になるまで混ぜて食

パンに塗る。これがなんと美味！森田の個装・インスタント甘酒と共に、皆、ペロリと平らげる。

Lの片付けをしてさあ戻るぞー、と非難小屋を出ると、なんだか雲が切れた感じ。決していい天気じゃないけどこれはお釜が見えるかも！！お釜が見えるポイントまで急いで下る。するとお釜が美しいその全貌を現した！おおお！私は何度か見たことがあるが、初めて見るというメンバーもいて、「初オカマ！生オカマ！」と写真を撮りまくる。



今回の山行の目標3割が達成されたため、皆ご機嫌。後の7割は小屋での酒盛り&女の子フリー限定トークだ。まず車まで戻って酒やつまみを大量にザックに入れ、小屋へ向かう。清溪小屋は地上2階、地下1階の立派な小屋だ。しかも2階は畳張りになっている。今日の使用者は我々だけなので2回の畳スペースを悠々と使うことにする。大木・田中は小屋で夕方に合流することになっており、2人がそろそろ着きそうになるころ、(現役生が)Dを作り始める。そして大木・田中登場！ワイイ久しぶりー、初めましてー、の挨拶もそこそこに、Dをいただきますー。Dの後には即、酒盛り開始。皆のザックからビール、梅酒、チューハイ、ワイン、出てくる出てくる、飲み放題状態。つまみも山盛り。女の子フリー限定トークにも花が咲き乱れる。限定トークの内容は極秘事項？だが、とにかく衝撃的な内容が多かったということだけは述べておきたい。そんなことを何時間やっただろうか、疲れ果てるまでしゃべってから就寝。爆睡。

朝は当たり前だが寒い。しかしガンガン雪が降っているのは気のせいであって欲しい。おーい、おーい、止



んでくれー。Bを食べ、しばらく待つが止む気配がないため出発。まあ15分くらいだからね。大丈夫だよ……。って言ってたけど、ベチャベチャの雪が容赦なく降り続けていたため、皆、全身ビショリ。でもそんなことはどうでもよろしい。問題はノーマルタイヤで来たのにエコーラインに雪が積もっていることだった。雪ってこんなに早く降るんだっけ(涙)エコーラインはクネクネしているし、絶壁だし、本当に危ない。チェーンを装備していなかったことを反省。しかしこんな天気だから他に車は通っていなかったため、後ろを気にせず十分に速度を落としてなんとか雪のないところまで下りて

これた。あー、無事でよかった。雪道での緊張の疲れは、青根温泉で癒され、その後ファミレスで食事。こうして女の子フリー2005は、幕を閉じたのであった。

最後に、企画・準備をしてくださった現役生のみなさん、本当にありがとうございました。
「女の子」ってまだ言っちゃっていいのか？！OG8年 小川 かおり でした。

いかがお過ごしですか？

4期(昭和40年卒)の小原佑一／大東磐司です。

12月初めにサイクロンによる集中豪雨と貯水池の水門を開けて放水したため、チェンナイ市内を流れる川があふれてしまい、事務所も軒下浸水してしまいました。決壊した堤防を見たところ、石とセメントを積み上げただけで鉄筋も入っておらず、いとも簡単に崩壊していました。強度計算なんか一切やっていない、張子のような見てくれだけの堤防でした。

電気も水も電話もない現場で給水タンクローリーと人手だけが頼りの後始末。居る場所がないので外に折りたたみの椅子を持って行って座っているので陽に焼けてしまいました。

足は泥でぬかるんでるので軽登山靴、雨が降っている時はGore-Texの雨具、いろいろと使い勝手の良いスイスアーミーナイフ、暗くなるとダイビング用の強カライトやヘッドランプ等現地の人が見たこともないような道具が次から次に出てくるので感心されました。水が引かなかったら筏の代わりに使おうと大型のエアーマットまで車のトランクに積んでおいたのですが……

川に倒れた木からコブラらしき蛇が川面を泳いで逃げていきました。大きなサソリの死体も見つけました。このサソリは持ち帰ってアルコール漬けにして保存しました。相棒が「まさか焼酎に漬けて飲むんじゃないでしょうね」と心配していました。

7期(昭和43年卒)の金子清敏です。

食料調達はその味を分ち合える限りは楽しいことです。

- ・春先には、蔦の柔い葉を秩父の山里へ採りに行き、酢醤油で大鍋一杯ゆっくり煮しめ、1年分の嗜好品を作ります。
- ・夏半ばになると、軽井沢の麓へ赴き、成長している茗荷をトランクと後部座席一杯に収穫し、自宅の屋上を茗荷畑にし、毎度の食に合わせて茗荷を一杯盛り付けます。
- ・秋には、出張先の中国で柘榴、林檎、李を田舎通りで100円でガッポリ買付け、宿で仲間との酒覚ましに用立てます。たまには農薬が何かで下痢することもあります……
- ・冬は、恒例の自宅の柿取りです。然し、最近の肥沃した体調ばかりでなく筋力の衰えを思えばこそ、現実に老人の域に達したのかなと、枝にそっと足を掛けてはその感慨を深めたことでした。

2年前に肩を壊して以来、ゴルフは中止、そろそろと思った矢先にアキレス腱を痛め、ここ3週間程は足を引き摺って苦勞しています。そんな中で、先日自宅の柿取りをしようとしたら、冬の柿の枝はもろいので以前は足・手を使いバランス良く枝渡りできたのですが、今年は重い体重での枝渡りが、枝の折れる危険と枝と共に落ちる不安が目先をよぎり足を竦ませたのでした。

今想えば沢登のできた昔が懐かしいことです。2000個以上実った真っ赤に熟した柿をそのまま放置してツグミの食料にするのも癪で、自分の成長と共に60年も育った柿の木の精に対して申し訳ないと謝りながら断腸の思いでノコギリで枝毎切り取り、その日の柿を収穫しました。来年は実りが少なくなりますが、また若枝が伸びて実をつけるようになれば、子供から孫へと柿の想いを伝えていくことでしょう。人は世代が代われど宿木はその代を朽木になるまで周囲を黙って見続けていきます。

12月中はそんな事で会社の休みの度に、梯子を掛けて柿取りに精を出しています。収穫した柿を日向で女房と皮むきして荒縄で軒に並べます。吊るされた干し柿は、寒風にさらされて実をひきしめ、陽光を浴びては、1日1日飴色を濃くしてふくよかに育っていきます。

9月には娘が嫁に行き、迎える正月は息子と3人になります。熟成した干し柿の家族一人当たりの食する割当てはこれからは増えていくことでしょう。皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

8期(昭和44年卒)の相原敬／あた です。

病気をきっかけに山登りを再開して6年目に突入しました。リハビリのつもりで始めた山登りなので、夫婦でのんきにピークハントを楽しんできました。同じ頃始めた高校の同級生G君は高崎労山の会員になり、今ではバリエーション豊かな活動をしているのを羨ましく思ったりもします。でもいいんです。我が家は夫婦共通の趣味として、いつまでも今のやり方を変えないでしょう。少しずつでも自分なりに難しい山登りができるようになればそれでいい。当面の目標は2泊3日の稜線歩きです。おっと、これは技術の問題ではなく、単に日程的な余裕の問題でしたね。

12期(昭和48年卒)の藤田真利子です。

夫に、拓哉さんから近況書けてメールが来てるよ、と言ったら、「働けど働けど収入なし、じっと手を見る」って書けば？と言われました。例年と同じようにせっせと働いたのに、出版社の担当が忙しすぎて本が出ず、ようやく年末に3冊出ましたが収入はすべて来年度回し。

出るのを待っている原稿がほかにも5冊分あります。夫は月1回のペースで山に行っていましたが、わたしは万歩計をつけてはいるものの毎日1000歩、2000歩という数字です。それでも太らないのはエコロジーに反して燃費が悪いのかもしれませんが。

最近健康診断を受けたら十二指腸に潰瘍があるといわれました。いままで家族から投げつけられた大雑把とか能天気といった悪口に反撃するため診断書をもらっておこうかと半分本気で考えています。

20期(昭和56年卒)の佐々木晃(ささき農園)です。

筑波山麓での百姓生活も5年目です。月刊「栄養と料理」5月号の「岸朝子の元気生活」という連載の中でささき農園の野菜セットが小さく紹介され、全国の読者の方から問い合わせが殺到(と言っても30件ほどですが)、半分くらいの方がリピーターになってくれ、ちょっと自信ができました。

3月には、サラリーマン時代の蓄えを全部はきだし、小さな自宅と農業用の納屋を新築。それに合わせてほぼ毎月1回、20期の岩屋、21期の富士原、植木、22期の石川たちが入れ替わりで援農に来てくれています。一般のお客さんと違って遠慮がないので、しっかり働いてもらい、夜は毎回炭火を囲んでバーベキュー。年中畑から離れられない当方にとってもいい気分転換になる以上に、実際の役にたっていて、大助かりです。

有機農業の現場は、山行と共通するリフレッシュ効果があることを実感していて、イタリアの高級ブランド店勤務で、およそワングル精神とは縁遠かった岩屋が8月の葛根田川遡行に参加するまでに復活しました。つくばエクスプレスの開業で、都心からのアクセスも格段に良くなったので、都会暮らしにストレスを感じている方はどうぞ一度お訪ねください。

22期(昭和58年卒)の利根川敏です。

TUWVを卒業以来22年、本格的な山登りからは縁が遠くなっています。現役時代の冬山に備え、仙台山荘という山用品店で特注した登山靴はいまでも玄関の片隅に健在で(長期間山に登っていない証か?)、大雪が降ると雪かきで大活躍してくれます。

02年の6月に仙台へ赴任以来、今年で4回目の年末を仙台で迎えます。トーキン(旧東北金属工業)とNECが事業統合してできたNECトーキンで、東北大学、宮城県、仙台市との組織的な連携や、研究中期計画策定など研究企画を担当しています。

NECトーキンには、私がTUWVの新入部員であった時のクラブ主将である小山さん(19期)も勤務しており、社内の会議でしばしばお会いします。

仙台赴任が始まった頃は、毎日7時ごろに帰宅できたため、学校の切れ目に家族全員を東京から仙台に呼び寄せましたが、家族がそろったとたんに東京の業務が増え、家族は仙台、私は東京出張(多い時は月の半分が東京)と、父親不在の子育てが続いています。

3人の子宝に恵まれ、長女(高3)は早々と推薦で東京の大学に進路が決まり、4月からは女子大生の一人暮らし、今はピアノにアルバイトと、残り少ない仙台の生活を満喫している様です。長男(高1)は高校野球の応援団で宮城県代表として夏の甲子園へ行きました。この時ばかりは家族全員が夜行バスで「へとへと」になりながらも、初めての甲子園を経験、アルプススタンドで応援をしてきました。次男(小6)はサッカー、そろばん、ピアノに鉄道マニアと多芸多才、今年は子供料金が通じる最後の年のため、私とローカル線の旅(東北～北海道:稚内で元旦か?)を画策中です。家内は話題のテレビドラマ「熟年離婚」の洋子役(松坂慶子)そ

のもので、このままの生活が続くと、私の定年を待たずにドラマが現実のものになりそうな雲いきです。

98年の新年会から始めました、TUWV電子メールアドレスの管理も8年目に入りました。皆様のご支援のお陰で270名ほどのアドレスが登録されています。今年も30件ほどのアドレス変更や新規登録がありました。個人情報の扱いが難しくなる時代、今回のOB会報原稿の募集からBccで一斉配信をしましたが、一部の方から「あまり難しく考えなくても・・・」との返信を頂いており、実害が出ない限りはTUWVの電子メールアドレスは例外扱いとした方が良いのかな・・・とも考えています。

欠席、申し訳ありません)、3月の新人OB/OG歓迎会(@仙台)、年末のOB会報原稿の投稿依頼+催促メール、会報の一斉配信などでお役にたてればと思っています。**最新アドレスが必要な方、電子メールの追加、修正が必要な場合には、下記連絡先までご一報下さい。**今後ともよろしくお願いいたします。

22期 利根川 敏 〒981-0962 仙台市青葉区水の森1-4-10

電子メール GWT00287@biglobe.ne.jp 携帯 090-1432-7806

34期(平成7年卒)の平賀岳彦です。

アメリカ・ミネソタにいます。ここにトータル5年ほどいつていることになり、自分でもこんなにと驚いています。昨日までは、学会のついでに、こちらで作った山仲間(みんな若い・・・)と共に、西海岸のタホ湖周辺の山に入り、4日ほど山スキーを楽しんできました。パウダーとみごとな斜面が潤沢にある、山スキー好きにはたまらないことでした。こちらに来ていろんなところで滑ってきましたが、ここは自信をもってお勧めします。カヌー・カヤック2艘手に入れ、山のない真平らなミネソタで川下り、湖めぐりの楽しさにも目覚めています。マイナス30度にもなるこれからの厳冬は、アイスクライミングに集中することになりそうです。すべてにおいて、遊ぶことを優先してきて、付けがもうすぐがきそうで心配ですが、なるようになるのかなと思っています。

36期(平成9年卒)の大森秀一です。

今までOB会活動にはあまり興味ありませんでしたが、思いがけず本号で投稿する機会を得ました。列島横断は暇な時間と多少のお金がないとできません。もちろん気力、体力、はたまた時の運も必要だったなあと感じています。2枚の原稿には到底収まりきれないくらい、とても貴重な経験をしました。

私はいま、キャノンでデジタル一眼レフカメラ(“EOS”シリーズ)の製品開発をしています。自分が一番やりたかったこと。それは他でもなく、自分の首に掛けていたカメラだったんですね。山々を歩き、写真を撮っていて、やっとそこに気づきました。山から下りて、会社で山の話をしたら雇ってもらえました。これは運。まわり道をしたのか、近道をしたのか今でも分かりませんが、私の人生、ずっと山と共にあるような気がします。

最近では手がけたカメラで日本の山々を撮り歩くことが、私のささやかな楽しみです。今後も皆さんに喜ばれるカメラを作り続けていきますので、お店で見かけた際はぜひ手にとって見てください。

37期(平成10年卒)の宇佐美穰です。

離仙して、関東に戻り、はや6年。今年5月には結婚をし、同期のワングルメンツから祝福を受けました。後日、同じく今年式を挙げた後輩の40期 田中大介、徳島ゆきな、高橋純とともに、上は36期の主将から現役部員まで、仙台秋保にて祝賀会を開催してもらいました。いずれも、心に残る会となりました。



↑ 1968年12月

2005年2月→



二口小屋のまわりも杉の林になりました。
伝蔵荘？ 翠雲荘？

新年会のお知らせ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2006年1月27日(金)18:30 (会費は10,000円の予定)

新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい) (TEL 03-3580-7811)

お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、出席ということになっているのに欠席される方も結構います。これは本当に幹事泣かせ。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogya1103@jcom.home.ne.jp

<2005年新年会出席者>

今年の新年会も去年と同じく、48名と大勢の方が出席されましたが、出席者を記録した名簿が見当たりません。

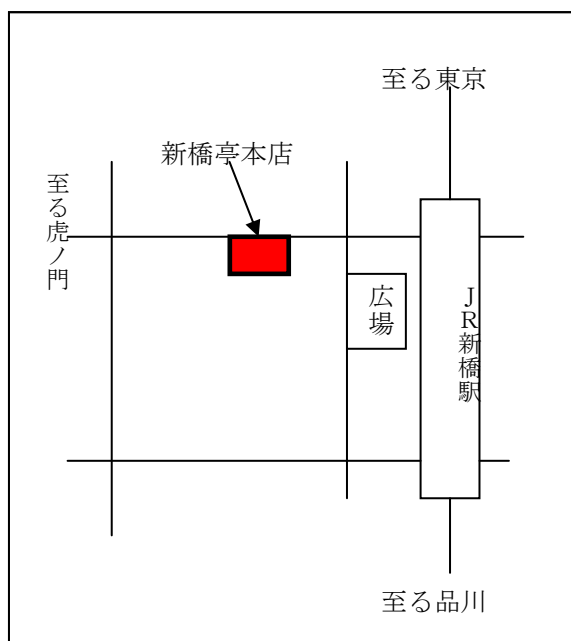
<OB会報バックナンバー>

会報も今年で36号になります。5号から作り始めましたが、昔のものは当然手書きで、今はなくなった湿式のコピーです。中にはガリ版刷りのものもあり、逆に懐かしさが込み上げてきます。古いものをスキャンし、HPに載せようと考えています。昔を懐かしみたい人はお楽しみに！

<eメールの力>

OB会も会員が約510名になりました。そのうち会報をメールで送っているのが半数の254名、郵送が134名です。

どっちも不明でお届けできない方が113名です。



TUWVOB会 2004年会計報告

(東京口座)

1. 収 入

前回から繰越	328, 268
OB会費(18人)	78, 000
利息	2
計	406, 270

2. 支 出

会報 印刷	14, 442
送料	12, 240
封筒、ラベル	971
事務用品、通信	1, 347
次回繰越	377, 270
計	406, 270

★★ 事 務 局 よ り ★★

◇ OB会員に不幸があった場合、OB会として次のように対応しています。

- ① 本人または配偶者に不幸があった場合はOB会として対応する。
- ② 葬儀に間に合う場合は同期の誰かがOB会名で生花を出す。費用は後日事務局に請求する。
- ③ 葬儀に間に合わなくて後日同期の方が線香をあげに行く場合は、OB会名の香典(本人の場合は1万円、配偶者の場合は5000円)を持っていってもらう(事前に事務局に連絡)。費用は後日事務局に請求する。
- ④ それ以外の場合は、あまりおそくならない限り事務局から香典を郵送する。

☆ 年会費は1000円です。1ページ目の口座に。